

VI 成果と問題点

1. ふたたび「ユカンボシ」の呼称について

a はじめに

遺跡名称にも使われている「ユカンボシ」について、筆者は前前回の報告書（『千歳市ユカンボシ C15遺跡(1)』）で、本来的な語はアイヌ語の「ペカンペウシ」であった可能性を指摘した。そこでは、諸記録の呼称を整理しその変遷をさかのぼった結論として、以下のように記した。

「地名の意味がすっかり失われ、川の名称にもかかわらず川のどのような特色でもって(地形、特産物)呼んだのか明らかでない。つまり地名の発祥の地とでもいうべきものが不明瞭なのである。(中略)しかし、(ペカンペウシが)『ユカンボシ』と呼ばれている地名のもとというには、『ペカンペ(ヒシ)の成育しうる地形条件』の吟味、P音の脱落の説明、伝承語義との連絡などに別途説明が必要である」

ここでは、3か年の調査で得られた遺跡周辺の地形と水位の変動などをもとに、「ペカンペ(ヒシ)の成育しうる地形条件」を検討し、地名の発祥の地を推定するなかで、ペカンペウシが十分に成り立つことを説明しておきたい。

なお、さきの論文でも指摘したとおり、「ユカンボシ」地名の初出は、1920年(大正9年)の「大日本帝国陸地測量部」発行の5万分の1地形図『漁(いざり)』である。そして、現在ユカンボシと呼ばれる地名はユカンボシ川のみである。この川は、恵庭公園の西端付近に源泉があり、ほぼ6kmほど東に流れ、河川改修の結果今では市道「南24号」が「長都川」と交差するところで合流している。

b 遺跡の環境

ユカンボシ C15遺跡は東西の長さ300m程の範囲である。水陸の交接するところで、標高は5～10m。1996年、1997年、1998年の3か年にわたる発掘調査の結果、東地区と西地区との間には流路の地形が横切って低湿部をなしており、東西の地区は別の地形単位として理解できることになった(図I-2・11・12、図VI-1・2)。この流路地形は自然河川としてのユカンボシ川である。古く縄文時代以来の流れであったが、農耕地拡大に伴って流路が変更された現在では「古ユカンボシ」あるいは「旧ユカンボシ」と称することになる。

西地区の範囲は、概略東西の長さ170m、南北の幅80mほどである(図I-11・12)。調査区の西半に幅20mほどで西から東に向かう低湿部がある。これは縄文時代以来の「古ユカンボシ川」の流路であり、調査区のなかほどでは蛇行している。屈曲の痕跡は流路の変化を示し、低湿部の拡大、縮小を暗示するものである。流路の変化が、遺跡の立地に影響をおよぼしたと推測できる。

c 地形と水位の変動

ユカンボシ C15遺跡は旧石器時代以降、繰り返し人間の生活の場となったところである。発掘調査した遺跡の遺構、遺物の有り様から判断して、縄文時代早期以降において川、沼の水位が上昇あるいは下降したことが明らかになっている。ここではアイヌ文化期の17世紀、18世紀、19世紀の水位に関して紹介する。

まず低湿部が相対的に陸化していた時期のことからはじめる。およそ1700年前から1200年前の頃、考古学的な時期区分では続縄文時代(I B 4層)から擦文時代初頭(I B 3下層)、この時期低湿部には樹木が繁茂し、直径0.7mに達する大木が育っていたようである。倒木後にキノコが生育していた様子も認められており、水位がはるかに低いところにあったことを物語っている。

1739年夏に降った樽前a火山灰(Ta-a)は、ユカンボシ C15遺跡では30～40cmの厚さで堆積しており、凹地では60cm程のところもある。この樽前a火山灰の降下直前の地形を見ると、標高は台地部では8.4

1. ふたたび「ユカンボシ」の呼称について



図VI-1 改修前の川と沼の様子

(この図は1920年(大正9年)「大日本帝国陸地測量部」発行の5万分の1地形図「漁」の一部である。)

～9.0m、低湿部では7.4～7.6mとなっている。草本の泥炭がほぼ水平に堆積している低湿部（I B 1層）は、水の流れは穏やかであり、停滞水域であった。現地性の樹木がほとんど認められないことは、低湿部が渇水期にも陸化することはなく、木本の成育には適さない環境だったようである。台地部に人間の生活の場があることと低湿部との標高差から推定すると17世紀、18世紀前半の水位は、8.0m±0.5mほどであろう。停滞した水の深さは、大きく見ても1mである。

これに近似する水位の川、沼の状態は白頭山-苫小牧火山灰(B-Tm)が降下する10世紀頃には始まっていた。縄文時代以降、ユカンボシ川の水路は西地区を横切っていたのであり、多量の木製遺物の残存、とりわけ舟に関連する遺物が、I B 3上層、I B 2層に見られることと整合的である。

それでは樽前a火山灰が降った後はどのようなものであったのか。降下火山灰により、台地部も、低湿部もほぼ40cmの厚さで地表面が高くなった。が、もとより低平な地であり、停滞水域であることには変わりがなかった。20世紀前半の地形図に表現されているように水路がいくぶん東側に変化した、水の流れは穏やかである。このような情景が、つぎの項に引用する古地図、諸旅行記から読み取れる。

19世紀の諸記録、20世紀前半の地形図などと低湿部との標高差から推定すると18世紀後半、19世紀の水位は、8.5m±0.5mほどであろう。低湿部での水の深さは、大きく見ても1mである。

図VI-2は、1947年撮影の空中写真をもとに作成した地形図に、自然河川としてのユカンボシ川を書き加えたものである。川の流路の確定には、1936年(昭和11年)の地形図、1962年撮影の空中写真から図化した地形図を使用した。

d 古地図、旅行記など

ユカンボシC15遺跡の付近はオサツ沼、オサツ川に近いこともあって、地図、旅行記などに具体的に表現される機会が多いところであった。周囲の水陸すなわち川、沼の様子がどのようなものであったか、18世紀、19世紀の諸記録で確かめておきたい。以下に引用する地図、旅行記は、いずれも樽前a火山灰(Ta-a)(1739年)以後の記録である。

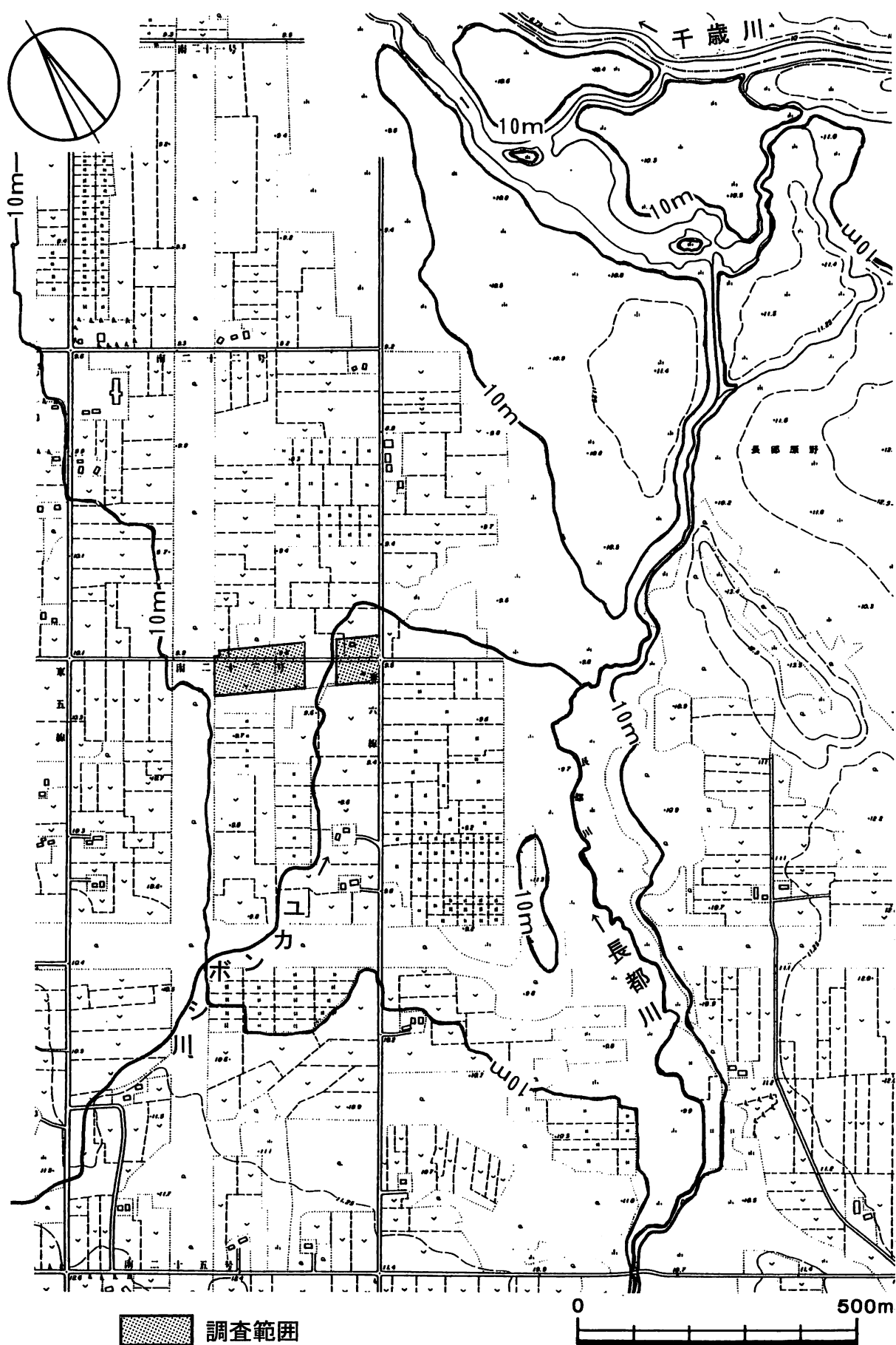
オサツの地名が明示されている古いものとして、まず1785年(天明5年)刊行の林子平『三国通覧図説』にある『蝦夷全国図』をあげることができる。これには「大沼ト云四里四方」から「イシカリ川」に続く川の南岸に「オサツ」が記してある。この「大沼」が旅行者にとって、きわめて大きな沼であったことは確かであるが「四里四方」という表現はいささか大き過ぎる。なぜなら、ここの札幌・苫小牧低地帯で標高10mをもって縁取りしても、その略東西の幅は10km程度でしかないのだから。

この図と同じように、きわめて大きな沼の表現は元禄御国絵図『松前蝦夷図』1700年(元禄13年)には始まっている。これでは沼のなかに「大ぬま四里四方程」と読める文字が記入しており、西南の岸に「おさつ」と読める地名もある。

1822年頃(文政5年)の間宮林蔵の地図と伝えられている『蝦夷全国図』は内陸の河川湖沼など詳細なものである。ここに見る『北海道古地図集成』(1987年、札幌、高倉新一郎編著)は、尺があまりにも大きすぎて地名が読みとれないが、地名に関しては、部分拡大図とでもいえるものが小林和夫作成で示してある。この小林の付録地名図には「ヲサツ」川の西隣に「井カンブシ」が描いてある。そして、この地図では「井カンブシ」川は直接沼に注いでいる。

この『蝦夷全国図』は、さいわいにも、恵庭市郷土資料館の1999年夏の特別展示『記録に現れたエニツ』において、国立国会図書館所蔵の『蝦夷図』の名称で写真パネルとして展示された。たしかに「井カンブシ」は「ヲサツ」川と並行して流れ直接沼に注いでいる(口絵-4)。この二つの川の名前は、アイヌ語の河川名でよく見られる「ポロ」「ポン」という親子、大小の関係ではないようである。

1. ふたたび「ユカンボシ」の呼称について



図VI-2 ユカンボシ川の流路

(この図は1947年撮影の空中写真をもとにして、1997年に図化したものである。川と標高10mの線を強調してある。)

それぞれが独立した特色のある川だと言えよう。

この間宮林蔵の図に前後する時期のものとしてしられている伊能忠敬『蝦夷国測量図』では湖水に「シコツ湖又曰ヲサツ」と「ヲサツ川」「ヲサツ」の地名表示がある。このうち「ヲサツ」は陸路、水路を結節する集落地を示すものである(口絵-3)。

串原正峯の『夷諺俗話』は1792年(寛政4年)の見聞である。ここには「シコツのヲサツトウといふ沼、差渡一里斗、此所にも鮭魚多し」とある。つづいて「先年此沼水枯し故、所の夷とも不思議に思ひし所、沼の川口に大魚の死したるありて、夫にせきられ川の水増し、沼の水かれたるよし。此魚はアメマスといふ魚の年経たるにて有しよし。右大魚の腹の中より丸に呑たる鹿二疋ありしとなり。」という不思議な記述がある。

武藤勘蔵の『蝦夷日記』は1798年(寛政10年)の見聞である。

7月25日 シコツ越とてイシカリ川を船にて登る道あり。この道を出立す。トイシカリといふ所にて、船中に泊す。26日、未明に出船。イザリ川といふ所にて日もくれ、又々船中に泊す。二夜とも大小便は上陸し山中へ通ふ。其たびたびに蚤の如き蟲、股、膝頭の下、足の甲まで一面真黒にたかり、むさき事かぎりなし。山中には熊、兎など沢山居るよしなり。

27日、夕がたシコツに着船す。28日、同所出立。船路にて東蝦夷地ユウブツに着船。一日逗留。

磯谷則吉の『蝦夷道中記』は1801年(享和元年)の見聞である。

(5月)4日、申刻過、ウツロ舟に乗(此舟は巾二尺計長二間計の大木をくりたる也。棹取之夷人三人、番人一人惣て七人座したりてみな自由なりがたし)、シコツ川を下る。早き事矢のごとし。壺里半計にしてオサツトウに至る。周廻凡五里計もあるへし。湖沼ナドノコトヲ夷人唱テトウト云。本邦ニテモ池沼ノコトヲ堤トイヘバ是モツツミノコトニテ塘ナルヘシ。ルウサンより三里余にしてイヒツと言所に至るに、酉の半刻頃なればいとくろふして、東西をわき難し。(後略)

石川和助の『観国録』は1857年(安政4年)の見聞であり、沼川のようなすは次のようになっている。

7月14日の「地勢」の項。〔イザリフトから千歳川をさかのぼり千歳へ行く〕

また二十余町にして中州あり、洲中、楊樹茂密地暫く行き右側漁場「カマカ」と云ふ(此所まで二里許りなり)。向岸に憩所あり、此の辺川幅三十余間、少し上れば忽ち五六十間となる水渉て船屢々戻す。兩岸湿地にて林樹甚少なく目界大いに騁(はせ)す。東南七八里外に連巒(れん)を望む。半里許にて左側「フシコカマカ」と云ふ。浜るに随ひ幅愈廣境に周廻二里許の沼となる(是は全く見積りなり)。沼中葦洲多く且水浅くして殆ど水澤の如し。半里許にて右葦間に小川流出す、幅二三間なり。此に船を入れ南若西に向ふ。其の最も狭き所は幅僅一間許りなり。両側は一円の野地也。此を「ヲサツベツ」と云ふ。川中に図合船七八艘を見る(此は鮭漁の際此辺の土人石刈へ出漁に至る舟の由)。此の間十余町にして左岸に上る憩所あり。

石川和助に前後する時期の松浦武四郎の見聞は以下のようにになっている。『丁巳第十五巻由宇堯利日誌』では「ヲサツ、此処に鮭番屋一棟有。其処よりチトセ並にイサリフトえ歩行道有るよし也。当時ユウハリ蝦夷八軒、……。扱此処より少し上がりて右の方小川有。字イカンフレと云よし也。…」とある。『夕張日誌』の地図を見ると「ヲサツトウ」に注ぐ「ヲサツ」の河口近くの北岸に「ヲサツフト」が記してある。この「ヲサツフト」から「イザリフト」に通じる陸路も書き加えてある。これは『東西蝦夷山川地理取調図の五』である。これから判断するとユカンボシC15遺跡の近くに(沼に接するところ)「ヲサツフト」の位置を推定できる。

1. ふたたび「ユカンボシ」の呼称について

以上の古地図、旅行記などをこの稿にそって整理すると、次のようになる。大きな沼(オサツ沼)の西側にオサツ川がある。沼と川との境は入り江状になっており判然としないが、オサツ川の北側には別の流れ「井カンブシ」もある。オサツ川は幅広いところでも5mに満たない。この川を少しさかのぼると、船たまりがある。あるいは水位が低下したようなときには、オサツ川を少しさかのぼったその右側に「井カンブシ」が枝別れしている。

e ペカンペ(菱)について

1998年以降の私の知見では、ユカンボシC15遺跡の東北方約4kmの「大学排水」の沼には、幅15mで長さ1kmに達するほどの菱の大群落があり、江別市の旧豊平川の停滞した水面にも大群落がみられる。江別市大麻の中央公園では野鳥観察小屋から真下に見ることができる。苫小牧市のウトナイ湖は菱の産地としてひろく知られている。いずれも水深1mより浅く、穏やかな流れの停滞水域である。

菱(アイヌ語でペカンペ)は夏に開花し、初秋に実る水生植物である。実の外形は略菱形であり、長さは4cm前後である(図VI-3)。長端はすどく尖り、逆刺し様の細毛の密列も備えている。熟した種実は、無味無臭で良質の澱粉である。水面に浮遊し葉を茂らすが、根は水底の泥質に食い込んでおり、定着的である。生育条件のひとつは、水深が1mより浅く、穏やかな流れが保たれることである。開花には、ユカンボシC15遺跡の近辺では、直射日光と28度程の暖かさが必要である。

菱(ペカンペ)の成育は道内全域において可能なのであろう。たとえば道東部では、釧路の東方厚岸町には別寒辺牛(ペカンベウシ)川があり、釧路の北方標茶町の塘路湖ではペカンペ祭がおこなわれている。これらはアイヌ語に由来するものとして良く知られている。

平秩東作の『東遊記』は1783年(天明3年)頃の松前地の見聞であるが、このなかに「菱をむきて菓子にうる」というのがある。さきに引用した串原正峯の『夷諺俗話』には、次のような記述もある。串原が宗谷から西海岸を南下するときテシヲでのこととして「(シカラカンデという夷が)妻を運上屋迄差越、予か所へ沼菱を進物として差越」した。これらは18世紀末葉の道南部、道北部での菱(ペカンペ)の記録である。

松浦武四郎は菱(ペカンペ)に関する多くの地名、民俗を記録している。例えば、1846年(弘化3年)の『再航蝦夷日誌』では、イザリブトの項で「夷人毎日曰にて沼菱を搗いて、これを平日の食料とし」とあり、カマカの項で「夷人小屋の前に菱を筵に干したり。これまた此処の食料か」とある。

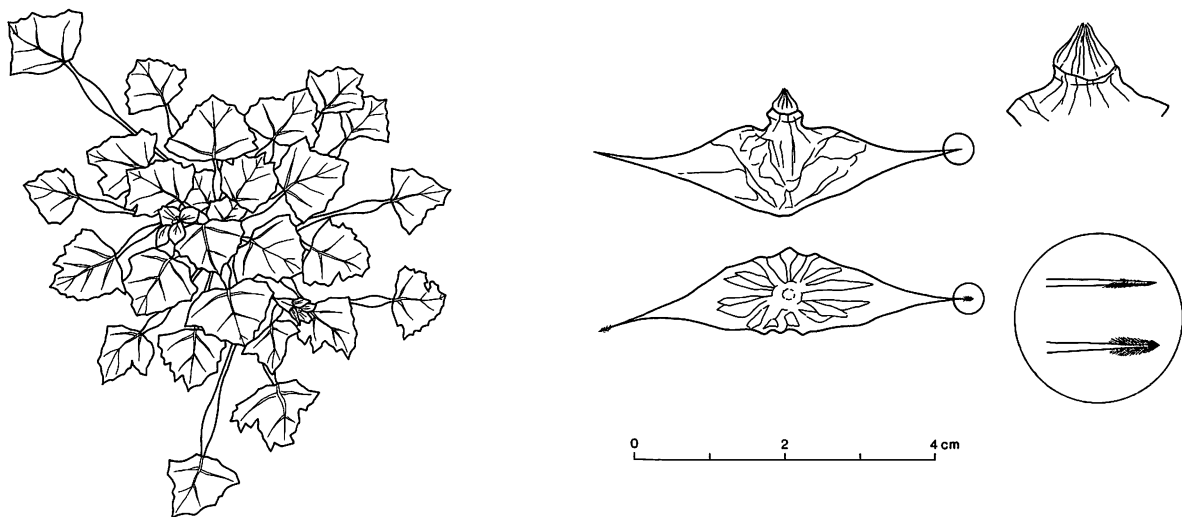
さらに1857年(安政4年)の「石狩日誌」5月12日の項には「夕方津石狩番屋に着す。…乙名ルヒヤンケ……翌朝菱実(ペカンペ)一升を我に餞す。」がある。また、美唄の沼でも多く産すると記している。なかでも『蝦夷漫画』では「菱実(ペカンペ) 菱のこと也。シコツ土人多く是を喰料とする也。多くとる處にて十俵、廿俵をも貯ふ。一名ユツクシとも云り」とあり、注目に値する。

1920年(大正9年)発行の五万分の一地形図『漁(いざり)』(図VI-1)には夕張郡長沼村の東3線南8号に『菱沼』の名称が書き込んであるが、同じ図幅のひとつ古い時期の刊行である1910年(明治43年)版では『イコクシ沼』とある。松浦武四郎が書き記した「ユツクシ」が地図では「イコクシ」とすこしずれている。この『菱沼』の地名は、1930年(昭和5年)刊行のものまでは残っているが、図幅名称を『恵庭』と変えた1936年(昭和11年)の図では、沼そのものが消滅しており地名もみられない。

f アイヌ語でのペカンペ

ペカンペ地名、ペカンペはどのように説明されているかを、関連する事柄を含めてみておく。

上原熊次郎の『蝦夷地名考並里程記』では、アツケシの項において「ペカンベウシとは沼菱の生すと云ふ事。此川に沼菱の多くあれば地名になす由」とある。



図VI-3 菱（水面の葉と花、実）

永田方正の『北海道蝦夷語地名解』には釧路国の項、胆振国の項に次のような説明がある。

釧路国厚岸郡の項。ベカムベ クシ Pekambe kushi 「水上ヲ通行シタル處」 注釈として（諸地図皆「ベカンベウシ」ニ作ル。アイヌ云昔人菱アルベシト思ヒ水上ヲ行キシニ、菱ナシ。故ニ「ベカンベクシ」ト名ケタリト）

胆振国千歳郡の項の「シコツ沼」「モペッ川筋」「千歳川筋」「長都川」「アンガリ沼」「マオイ沼」「漁川筋」のうち「マオイ沼」の部分に

イウクシュ トー Iukush to 「菱ヲ採ル沼」とある。つづいて「カマ カ コタン」「カリンパウシ」となっている。

ちなみに永田方正は「井カンブシ」をどのように説明しているのか。残念ながら、ここで目になっている「胆振国千歳郡」の地名では「オサツ」はあるが「井カンブシ」に相当するものは見あたらない。巻末の折り込み地図でも「オサツ」はあるが「井カンブシ」に相当するものはない。そのような小さな地名であったということであろう。あるいは交通路が河川から陸上に変わりつつあり、その重要性が低下していたのかもしれない。

山田秀三は『北海道の地名』と「アイヌ語地名の話」で次のように説明している。まず『北海道の地名』厚岸町の項。

別寒辺牛（べかんべうし） 厚岸町内の川名、地名。別寒辺牛川はこの辺一帯の湿原の水を集め、厚岸湖の西北隅に注ぐ長流。上原熊次郎地名考はアッケシの項の中で「ベカンベウシとは沼菱の生ずといふ事。此川に沼菱の多くあれば地名になす由」と書いた。pekanpe-ush-i(菱・多い・処)といわれたものであろう。

永田地名解は「ベカンベ・クシ（水上を行く）。菱を取らんと欲し此処に来たりしが菱は絶えて無し。徒に水上を行きしを以て名くと」と妙な書き方をした。たぶん上原地名考の形が原名で、後に菱がなくなってでもいて、この解のように、ウシをクシに読みかえて説話をつくったのではなかろうか。

さらに「アイヌ語地名の話」の「草の名」の「根を掘って食べた主な草」の項。

ベカンペ pekanpe(菱の実) 菱の実は当時の御馳走だったが、この名で呼ばれた地名は少ない。

イウクットー（ユクットー）i-uk-ush-to(それを・採る・いつもする・沼)。この形なら、「それ」とは

1. ふたたび「ユカンボシ」の呼称について

菱の実のことだった。

上原熊次郎の『蝦夷方言藻汐草』では「菱 ベカンベ」となっている。知里真志保の『地名アイヌ語小辞典』では補遺部分に「pekampe」は「ヒシの実」と説明してある。久保寺逸彦編『アイヌ語・日本語辞典稿』では「pekampe 菱実」とある。中川裕の『アイヌ語千歳方言辞典』では「ベカンベ pekampe ヒシの実」とある。萱野茂の『萱野茂のアイヌ語辞典』では「pekan-pe ヒシ(の実)」である。田村すず子の『アイヌ語沙流方言辞典』では「pekanpe ヒシ(菱)の実 [水・の上・にある・もの]」である。

g ベカンベウシの可能性

自然状態では、例えば500～100年ほど昔は、ユカンボシ川はオサツ沼の西の広がりの中に直接流れ込んでいた。つまり、河口部は沼の一部であった。あるいは水位がいくぶん低下すると、ユカンボシC15遺跡の中央部を北へ抜け、大きく東に曲がりオサツ川に合流していたものとみなされる。このような川と沼の様子は、1936年(昭和11年)の地図にも表現されている。

この川沼の水深が1 mより浅く、穏やかな流れが保たれたであろうことは発掘調査の結果からも肯定できる。このような水域は、菱(ベカンベ)の成育環境としては充分である。したがって、川の特産物で川の名とした、つまりベカンベウシの地名発祥の地は、オサツ川と区別しうるユカンボシC15遺跡のあたりに推定できよう。

(西田)

引用、参考文献

- 高倉新一郎編著『北海道古地図集成』1987年
林子平『蝦夷国全図』(三国通覧図説) 1785年(天明5年)
伝 間宮林蔵『蝦夷全図』1822年頃(文政5年)
伊能忠敬『蝦夷国測量図』1821年頃(文政4年)
平秩東作『東遊記』1783年頃(天明3年)の見聞
串原正峯『夷諺俗話』1792年、1793年(寛政4、5年)の見聞
武藤勘蔵『蝦夷日記』1798年(寛政10年)の見聞
磯谷則吉『蝦夷道中記』1801年(享和元年)の見聞
石川和助『観国録』1857年(安政4年)の見聞
松浦武四郎『再航蝦夷日誌』1846年(弘化3年)の見聞
佐々木利和編『アイヌ語地名資料集成』1988年
上原熊次郎『蝦夷地名考並里程記』1824年(文政7年)
永田方正『北海道蝦夷語地名解』(初版1891年(明治24年)の復刻版は1984年)
知里真志保『地名アイヌ語小辞典』(初版1956年、復刻版1984年)
山田秀三『北海道の地名』1984年
山田秀三「アイヌ語地名の話」、『アイヌ語地名の輪郭』1995年所収
久保寺逸彦編『アイヌ語・日本語辞典稿』1992年
中川裕『アイヌ語千歳方言辞典』1995年
萱野 茂『萱野茂のアイヌ語辞典』1996年
田村すず子『アイヌ語沙流方言辞典』1996年
西田 茂『「ユカンボシ」の呼称について』1998年『千歳市ユカンボシC15遺跡(1)』